

## 「イエスの死と埋葬」 (ルカによる福音書二三章四四～五六節)

### 1 十字架の意味

今週は受難週、イエスの十字架の出来事を記念する週です。死んだのは金曜日のことでした。その日、夕方には十字架から降ろされ、埋葬されます。こうしたことを今週は改めて思い起こすときです。

十字架の出来事を伝える聖書箇所、私どもはこれを四つに分けて、すでに先週、その最初の二つの場面を取り上げています。イエスがゴルゴタへ歩んでいく場面と、犯人二人と一緒に十字架にかけられた場面です。今日は後の二箇所、すなわち、イエスの死と、イエスの埋葬の場面を、一緒に読んでいくことになります。

さて聖書は、このイエスの十字架の死を、まさに神の救いの出来事として宣べ伝えていきます(コリ一、一・二三、ペトロ一、二・二四)。これは私どもはつきり知っていることですし、今日の箇所を読む上でもっとも重要なことです。

しかしこのイエスの十字架の死が、はじめからそのような神の救いのわざ、救いの出来事として、すべての人間にかかわるものだと、人びとに受けとめられたのかというと、決してそうではありません。

そもそもイエスの弟子たちが、師イエスが捕らえられることが起こって、みなイエスを見捨てて逃げてしまったことを、私どもは知っています。イスカリオテのユダはその前に自ら進んでイエスの捕縛に手を貸し、ペトロもイエスを知らないと言ってしまったのです。もしイエスの十字架の死と復活が、神の救いであることを、よく知っていたならば、弟子たちの行動も、あるいは少し違ったものになっていたのではないでしょう。

「よく知っていたならば」と申しましたが、実際弟子たちは、イエスから、メシアは必ず多くの苦しみを受ける、長老、祭司長、律法学者らから排斥され殺される、しかし三日目に復活することを聞いていたのです(九・二二、一七・二五、一八・三二以下、二〇・九以下)。イエスをメシア、キリストとして告白していましたが(九・二〇)。しかしそれと十字架の死との関係は、どうも彼らにはピンときていませんでした。むしろそんなこと、あってならないこと、すなわち「つまずき」以外の何ものでもなかったのです。彼らにとつて、それは、救いの出来事であるどころか、それとは正反対のものに見えたのです。

そのような彼らが、イエスの十字架の死の意味にはじめて目が開かれたのは、十字架で死んだ、殺されたイエスがよみがえって、新しい命の担い手として、彼らに現れてからのことでした。

まさに裏切り、見捨て、イエスとの関わりを人前で否定した彼ら弟子たちのところに、また来てくださった、新たな力を与えてくださったのではなく、宣教という使命も与えてくださった、そこから弟子たちは、メシアであるイエスの十字架の死の意味に目が開かれたのです。

その際、イエスが生前弟子たちに語り、教えてくださったことがいろいろ思い出されたわけではありません。彼らが親しんでいた聖書、旧約聖書の証言も、例えばイザヤ書五三章など、大きな役割を果たしたのです。

いま例えばイザヤ書五三章などと申しましたが、実際そこには一人の神のしもべの

苦難と死のことが書いてあります。苦難というのは、イスラエルにおいて、神が罪をきよめ、神に立ち返らせるための一つの試練であり、時に裁きでもあります。とりわけ罪のないものの苦難は、他者のために苦しむことであり、それは神の前での贖罪の行為（あがない）でもあったのです。イザヤ五三章の一人の神のしもべは、まさにそういう者でした。聖句を一つ引きます。

彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によってわたしたちはいやされた（五三・五）。

こうした箇所が、弟子たちには、イエスのことと重なって見えたのです。関連する箇所を、新約聖書から一つだけ引けば、例えば、コリント信徒への手紙二の次の聖句です。

神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあつて神の義となるためなのである（五・二一）。

このほかにも同様の言葉があります（ローマ三・二三以下、五・六以下、ヘブライ五・七以下）。罪のないイエスがあはして十字架の苦しみを味わったのは、旧約聖書が示していたように、それは、他者のため、イスラエルの罪のあがない、いなわれわれすべての者のあがないのためだったのだと、使徒たちに受けとめられ、神の救いの業としてその理解は深められていきます。ルカが描く十字架の出来事も、そうした使徒たちの理解の中で書き記されたものです。

## 2 裂けた垂れ幕

さてイエスが、十字架につけられたのは、マルコによる福音書によれば、午前九時でした。

すでに昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時までつづいた。太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。イエスは大声で叫びられた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」。こう言って息を引き取られた（四四〜四六節）。

十字架の上にイエスは六時間かけられていました。長いようですが、通常に比べてじつは非常に短い時間です。さらしものにするのも十字架刑の目的です。長くさらして、見せしめにしたのです。

昼の十二時ごろ「全地は暗くなり・・・太陽は光を失っていた」とあります。太陽が光を失うとは、言葉遣いからも日食と考えられています。いずれにしても、ここにも、闇のイメージが出て来ます。「闇が力を振るっている」（二二・五三）というイエスの言葉を覚えておられるでしょうか。

闇はここに来てもっとも深くなります。しかしこの暗闇の中でも神はいます。それを明らかに示したのが「神殿の垂れ幕が真ん中から裂ける」という出来事でした。こ

の「裂けた」というところは、元の言葉では、垂れ幕は裂かれた、という受け身の言い方になっていきます。神によつて裂かれた、神がこれを裂いた、破った。

「神殿の垂れ幕」というのは、神殿の一番奥のもつとも神聖な場所、「至聖所」の前の隔てのカーテンです。至聖所には神の箱が置かれ、その箱の蓋の上、ケルビムと呼ばれる架空の動物の彫像に守られた空間が、見えないけれども神が臨在するところとされていきました。大祭司だけが、年に一度、罪のあがないの儀式をおこなうために、入ることが許されていたところ（ヘブライ九・三）。

その至聖所を特別なものとしていた垂れ幕が真つ二つに裂けたということは、簡単に言えば、イエス・キリストの十字架によつて人が神に近づく道が開かれたことを意味します。

神に近づく道が、これまでもなかったわけではありません、それは律法による道です。そしてそれをユダヤの指導者たち、とりわけ宗教の指導者たちは自分たちの権威だけでなく利権もからんで守ろうとした。それゆえイエスを殺そうとした。しかしそれは成功しなかったのです。むしろイエス・キリストは、死んで、人間の罪をみながない、神との関わりと祝福に生きる道を、すべての人びとに開いてくださった。このことがなつたと同時に、イエスは息を引き取っています。

何が起つたか、これを見て取つた人びとがいきました。今日は詳しく触れることはできませんが、一人はイエスの十字架の死に遭遇し、この出来事を見て、この人は正しい人だつたと言つて神を賛美した異邦人、ローマの百人隊長です。さらに胸を打ちながら帰つて行つた群衆もいます。さらにそこに挙げてあるのは、イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従つて来た婦人たちです。この「イエスを知っていたすべての人たち」は曖昧な言葉です。彼らも「遠くに立つて」見ていました。おそらく弟子たちのことです。しかしこれ以後彼らは復活のことを婦人たちから聞くまで出て来ません（二四・九）。

### 3 埋葬

イエスが死んだのは午後三時です。そろそろ夕方です。この箇所の後ろのほうに断り書きがあるように、「その日は準備の日で、安息日が始まろうとして」いました（五四節）。安息日は金曜日の日没から翌日土曜日の日没までです。一番星が出るまでという言葉もあるようですが、同じことです。

申命記には、木にかけられる者は呪われる、これを夜通し放置して聖なる地を汚してはならないという掟があります（二一・二二）。もしこの日遺体を取り降ろすつもりなら、時間はあまりありません。先ほど遠くからイエスの十字架を見ていた人のいたことは確認しました。しかしローマへの反逆者として殺されたイエスを（二三・三八）敢えて引き取る人はいるのでしようか。

今日の聖書によれば、アリマタヤのヨセフという人が、イエスの遺体の引き取り方を願ひ出たというのです。

さて、ヨセフという議員がいたが、善良な正しいひとで、同僚の決議や行動には同意していなかった。ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでい

たのである。この人がピラトのところに行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願ひ出て・・・(五〇〜五二節)。

ここに紹介されていることのほかに、マタイによる福音書には、例えば金持ちであったともあります。それだけでなく、同じくマタイには、イエスの弟子の一人であったとありますし、ヨハネによる福音書には、そうだけれども、ユダヤ人たちを恐れていて、弟子であることを隠していたというようなことが書いてあります。マルコによる福音書は、ヨセフが「大胆にも」願ひ出たと書いています。処刑された者の、彼はいわば身元引受人になろうとしているのです。

このヨセフはイエスの生前、その信仰をはっきり言い表すことをしなかったのです。その点は「善良で正しい人」「神の国を待ち望んでいた」といつても、必ずしも模範的とはいえないでしょう。

ただはつきり、最高法院の議員として、「同僚の決議や行動には同意していなかった」とありますので、イエスを、ローマに訴え出ることには、議員として賛成していなかったのです。それなら議会で「反対した」のかといえば、書いてありませんけれど、それでもなさそうです。同じ立場のニコデモと共に(ヨハネ一九・三九)、はじめから外されていた可能性もあります。

そうだとすると、この度のピラトへの大胆な願ひは、彼の信仰の態度の大きな変化を示すものと見てよいと思います。ローマの百人隊長が、言葉で、イエスを神の子と告白したように、ヨセフは、行動をもって、危険を冒して、信仰の告白をしたということが出来ます。その意味では、最後にイエスを知らないと言ったペトロと対照的です。良い悪いのことではなく、そのように信仰を表すように神が彼を導いてくださったのです。

イエスの埋葬のことが、こう書いてあります。

遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めた(五三節)。

イエスを十字架から降ろす、アントワープ大聖堂のルーベンスの絵を私どもは思い起こします。聖書のこの箇所から、あれだけの大作に仕上げることに驚きますが、それはともかく、イエスがいてねいに葬られたことが印象的です。衣服を剥ぎ取られたイエス(三四節)を「亜麻布で包み」、使われたことのない、ヨセフが自分のためにつくっておいた墓の中に(マタイ二七・六〇)納められたことは、ていねいな葬りを物語っています。

イエスは葬られました。確かに死んだのです。葬られることをある人はこんな説明をしています。人びとは墓地に出かけて行きます。一つの棺を、あるいは一つの骨壺をそこに納めてみな家路につきます。しかし一人だけはそこから帰らない。それが死者。生ける者の地で余計な者。イエスも葬られて、そのような死者の一人となったのです。しかしそれはまた甦りの備えでもありました。イエスが甦り、それゆえ私どもも甦るために葬られたのです(テサロニケ一、五・一〇)。